

組織学会通信

No.89

2021. 9. 20

【大会関係】

【1】2021年度組織学会研究発表大会報告

2021年度組織学会研究発表大会は、東洋大学主催で、寺畑正英先生を実行委員長として、2021年6月5日(土)、5日(日)に開催されました。

今回も新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、3回目のオンラインでの大会開催となりました。今年に入って感染者数が増加を見せる中、寺畑正英実行委員長をはじめとする東洋大学実行委員会の先生におかれましては、大学への立ち入りもままならないという厳しい状況の中、オンライン大会に向けてご準備いただきました。また当日も実行委員会の先生方が、別々の場所からホストとして運営してくださいました。司会、発表者の先生方にも、事前練習へご参加をお願いしたり、一部の先生には発表と同時にセッションの司会をお願いしたりするなど、運営にご協力をお願いいたしました。おかげ様で大きなトラブルもなく盛況のうちに大会を終えることができました。

他方で、前回に比べ事前練習に無断欠席される発表者が増えたり、発表直前まで現れなかった発表者がいたり、発表の最中に消音設定にし忘れた聴衆によって発表が止められるといった、いくつかの小さなトラブルも発生し、実行委員会の先生方が対応に追われるという一幕もありました。悪い意味での「オンライン慣れ」が露呈してしまったようです。次回の神戸大学が主催する年次大会も、オンラインでの開催が決まっております。その際には「オンライン・マナー」を徹底するよう、会員の皆さんにお願い申し上げます。

研究発表大会の初日は三会場で研究報告が行われました。一日目の午前は大学院生セッション、午後から研究発表セッションと基調講演、二日目は一日かけて研究発表セッションが行われました。大学院生セッションは大会委員である司会者と発表者によって進められました。研究発表セッションは25分間、発表者が自由に時間を使っていただくという形で進められました。

一日目の午後の基調講演では、寺畑実行委員長が司会をされ、東洋大学教授・情報連携学部長である坂村健先生のご講演が行われました。坂村先生はコンピューター言語トロンの開発者であり、コンピューター言語の世界的権威です。坂村先生からは、トロンの開発と普及に携わったご経験からDX社会におけるオープンイノベーションの重要性や、現在、東洋大学で行われているAI教育の取り組みと工夫について、1時間ほど刺激的なお話を

いただきました。

一日目の最後のセッションは、高宮賞の受賞式と総会でした。高宮賞には著作部門2名、論文部門2名、総計4名が受賞することになり、新宅学会長からオンライン越しに賞状と盾が授与されました。その後、評議委員改選に伴う選挙が行われ、はじめてのオンライン投票が行われ、結果は二日目に発表されました。

二日目の午前中は研究発表セッションが行われました。午後の最初に高宮賞セッションが行われ、4人の受賞者から20分ずつスピーチをいただきました。その後、研究発表セッションが続けられ、16時30分ごろに全工程を無事に終了することができました。

2日間の長丁場において、PCの前に座り続け、管理運営を行ってくださった東洋大学の実行委員会の先生方には御礼申し上げます。大変お疲れ様でした。

次に大会委員会の活動について御報告いたします。研究発表大会のオンライン開催決定を受け、大会委員会は応募された原稿をもとに審査をし、発表の可否を決定いたしました。本大会での発表の採択数は61件、不採択数は3件(演題登録者の記載不備)で、採択率は昨年と同レベルの93.8%となりました。

また大会委員会は例年通り、大学院生セッションで審査を行い、「ドクトラル・コンソーシアム」(略称「ドクコン」)参加メンバーの選出を行いました。ドクコンは、次代の若手研究者育成を目指す取り組みで、年次大会前日に開催されます。研究発表大会における大学院生セッションでの報告の中から大会委員会が選出を行い、大会終了直後に「インビテーション・レター」をご送付しておりますが、今年度も5名の大学院生をドクコン参加者として選出いたしました。

また大会終了後は、大会報告される会員が希望する場合、大会報告原稿を『組織学会大会論文集』(略称「トランザクションズ」)のJ-STAGE(独立行政法人科学技術振興機構(JST)のオンライン・ジャーナル・システム)掲載する作業を進めております。トランザクションズに掲載された論文は、J-STAGEを経由して、その書誌情報がGoogle ScholarやEBSCO hostに提供され、全世界から英語での論文検索の対象となります。よってJ-STAGEに掲載するためにはReferencesをはじめとする執筆要綱の遵守が求められます。

しかし残念なことに、J-STAGE 掲載希望原稿のなかには、執筆要綱に準じた執筆が十分に行われていないものが多く、その校正作業は大会委員会および事務局によって担われ、それは大きな負荷となっております。この問題に対し、今年からトランザクションズ編集アシスタントを公募し、応募いただいた5名の博士課程大学院生に編集作業をお手伝いしていただきました。また東京大学の高橋伸夫先生が編集アシスタント統括をお引き受けくださり、編集作業を仕切ってくださいました。お手伝いいただいた大学院生の方は以下の通りです(敬称略)。

編集アシスタント統括

東京大学大学院 経済学研究科教授 高橋 伸夫

編集アシスタント（敬称略）

京都大学大学院 経済学研究科 井川 佳実

東京大学大学院 経済学研究科 會澤 綾子

大阪市立大学大学院 経営学研究科 柳 淳也

神戸大学大学院 経営学研究科 田村 祐介

神戸大学大学院 経営学研究科 林部 由香

編集アシスタントの任期は1年で、この活動が継続するのであれば来年1月ごろに公募があります。その時には大学院生の方は是非奮ってご応募ください。編集アシスタントを経験することで、論文の体裁や参考文献の書き方について、しっかりとした知識を得ることができます。他方で、今後、研究発表をお考えの会員におかれましては、応募をする前に必ず執筆要綱をご確認の上、テンプレートを使用して原稿を執筆し、最後に必ずチェックリストで確認してからご提出ください。

今回の研究発表大会で、今期の大会委員会の任期は最後となります。担当大会のうち3つがオンライン開催となり、それに伴ってイレギュラーな事態への対応や難しい意思決定に直面することが何回かありました。これらをなんとか乗り切れたのは、各主催校の実行委員会の先生方のご尽力、また常に前向きにご対応くださる大会委員会の先生方がいたからです。また大会委員会の活動をバックアップしてくださった新宅会長をはじめとする理事の先生方、そして何よりも常に包括的かつ確かなアドバイスを下さる事務局の伊東様、樋口様の献身なくしては不可能だったと思います。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

*2022年度組織学会年次大会(神戸大学)のお知らせ

2022年度組織学会年次大会は、2021年10月30日(土)、31日(日)に、鈴木竜太実行委員長、服部泰宏大会委員を中心に神戸大学主催で開催されます。年次大会もオンラインでの開催となります。今大会では15の組織論レビューのセッションが中心となります。他に編集委員会セッション、企画委員会+大会委員会共同セッション、ランチョン・ミーティングを企画しております。それぞれのセッションの内容は、時間をかけて練りこまれた質の高い内容となっておりますので、期待してご参加いただければと思います。

組織学会大会委員会担当理事 福嶋 路

2021 年度組織学会研究発表大会 開催校挨拶

2021 年度組織学会研究発表大会は、6 月 5 日(土)・6 日(日)の 2 日間、昨年に引き続きオンライン形式(Zoom 利用)により開催されました。

新型コロナウイルスの流行が収まる気配がないなか、研究発表大会の開催形式に関して模索いたしました。残念ながら今年の研究発表大会もオンラインで行うことになってしまいました。対面で行われてきた研究発表大会では、研究発表もさることながら、その合間にある会員同士の交流から新たな知の創造が行われるといったこともありましたが、オンラインではそのようなインフォーマルな交流が難しく、研究発表大会の価値が損なわれるのではないかと懸念いたしました。苦渋の決断ではございましたが、我々の出来ることを確実にやり、会員の皆様の研究活動に資するような大会を目指す事としました。

このような状況にも関わらず、多くの会員の皆様にご参加いただきました。大学院生セッションで 17、研究発表セッションで 43、合計 60 と、昨年並みの発表が行われました。参加者数(参加登録人数)は 414 名で、多くの会員の方々にご参加頂きました。

オンラインによる研究発表大会のデメリットばかりを懸念しておりましたが、メリットもあったように思います。ご家庭の事情や学務などで参加が難しい皆様にも参加しやすい状況をつくることができたと思っております。そうしたなかで、少しでも対面の大会に近づけようと特別講演を企画いたしました。本学の情報連携学部学部長で東京大学名誉教授の坂村健先生に、演題「オープンプロジェクトの進め方 ～TRON プロジェクトを例として～」でご講演いただき、盛況に終わりました。

対面開催ができないという困難な状況のなか、事務局および大会委員会の皆様方には、大変なお力添えを頂きました。また、会員の皆様にもご協力頂きまして、心よりお礼申し上げます。2 回の研究発表大会がオンラインで開催されたことにより、課題も浮き彫りになったと思っております。これまで、対面でコミュニケーションをすることによって得られていたものを 100%取り戻すことが出来ていたかどうかは心許ないように思います。また、オンラインによる開催の新たな可能性を追求することも発展途上にございます。対面では実現し得ない試みもあったかと思いますが、うまく引き出すことができなかつたようにも思います。今後の課題を残してしまったことは心残りですが、次回以降の開催校の皆様が必ずや新しい形を考えて頂けると考えております。

新型コロナウイルスの感染状況が落ち着くかどうかは予断を許さない状況にございますが、会員の皆様におかれましてはくれぐれもご自愛頂きますようよろしくお願いいたします。

2021 年度組織学会研究発表大会実行委員長(東洋大学) 寺畑 正英
実行委員会・開催校一同

【2】2022年度組織学会年次大会のお知らせ

2022年度組織学会年次大会を、以下の通り開催いたしますので、会員の皆様には、是非ご参加いただきたく宜しくお願い申し上げます。

日時：2021年10月30日（土）・31日（日）

開催校：神戸大学 ※「オンライン」での開催を予定しております。

統一論題：「組織論の現在地（知）」

今回は「組織論の現在地（知）」と題して、以下のコンテンツより構成される予定です。

- (1) 組織論レビュー
- (2) 組織科学編集委員会セッション（30日午前→31日午前に変更）
- (3) ランチョンセッション
- (4) 新組織学会長セッション
- (5) 組織論レビュー総括セッション

「組織論レビュー」は、1年半の歳月をかけて文献レビューを行ってきた15組の中堅・若手メンバーによる成果発表と、各テーマの第一人者によるコメントによるセッションです。各セッションは90分と通常の研究発表よりも大ボリュームとなっており、ミクロ組織論、マクロ組織論、イノベーション論など、経営学を構成する各領域の現在地（知）を存分に体感していただけるのではないかと思います。当日はこれに加えて、組織科学編集委員会主催の「組織科学編集委員会セッション」、研究者のキャリア・就職問題に焦点を当てた「ランチョンセッション」、新学会長による「組織学会長セッション」などのプログラムも用意しております。最後に、「組織論レビュー総括セッション」と題して、大会全体を締めくくるセッションを予定しております。組織論レビュー実行委員会と組織論レビュー参加メンバーにより、「過去の文献の探訪から、どのように未来の問いを紡ぎ出すか」ということに関する議論を行いたいと思います。なお、組織科学編集委員会セッションについて、開催時間が変更（30日9:00-12:10 → 31日9:00-12:10）となっておりますのでご注意ください。

会員の皆様が、組織研究の現在地（知）に触れていただく機会になれば幸いです。

なお、大会に関するお知らせにつきましては、組織学会ホームページ (<https://confit.atlas.jp/guide/event/aaos2022nenzi/static/outline>) にて随時掲載いたします。

2022年度組織学会年次大会 実行委員長
神戸大学 鈴木 竜太

【3】2022年度組織学会研究発表大会のお知らせ

2021年度組織学会研究発表大会は、2022年6月4日(土)・5日(日)の両日、東北大学で開催される予定です。2022年は東北大学法文学部(経済学部の前身)が開設されてから100年目を迎える年であり、そのような記念すべき年に本学で組織学会を主催できることは誠に喜ばしい限りです。

本来でしたら、この時期に大会開催形態についてもう少しお知らせできる内容があるはずでしたが、新型コロナウイルス感染の収束がまだ確認できず、他方でワクチン接種が加速化するなど状況は極めて流動的であり、開催形態について現時点で確実にお伝えできる内容はほとんどございません。詳細は追ってお知らせいたします。

内容につきましては例年の研究発表大会のとおり、自由論題による発表が中心となります。開催方法はどうか、大学院生セッション、研究発表セッションは通常どおり実施ができるように準備する所存でございます。来年には研究発表を通常通り公募いたしますので、会員の皆様におかれましてはご準備のほどよろしくお願いたします。

不確定要素が多い中におきましても、会員の皆様にご満足いただけるような研究発表大会となりますよう、実行委員会一同、鋭意努力いたしますので、どうぞご理解とご協力の程、よろしくお願いたします。

2022年度組織学会研究発表大会(東北大学)実行委員会

【4】ドクトラル・コンソーシアムについて

6月の研究発表大会の大学院生セッションで報告した方の中から、大会委員会が選んだ大学院生を、その年の秋の年次大会時に開催する「ドクトラル・コンソーシアム」(ドクコン)にご招待いたします。大会委員会の選考基準は「組織科学に投稿して採択されるような論文になることが期待される報告」です。大会委員会で選ばれた方には、研究発表大会終了直後に「インビテーション・レター」をお送りいたします。ドクコンはその年の年次大会前日にほぼ丸一日かけて開催されますので、ドクコンご参加の意思確認をいたします。ドクコン参加者の当該年次大会の参加費は免除します。

ドクコンは、いわゆる Paper Development Session です。ドクコン参加者は、全員が『組織科学』仕様の(投稿規定に則った)論文を持ち寄り、オーガナイザーの指導の下、互いに切磋琢磨することを求められます。ドクコン提出論文は、「組織学会ドクトラル・コンソーシアム査読付報告論文」と明記できるようになりますが、それに満足することなく、ドクコン終了後できるだけ速やかに修正し、『組織科学』等に投稿されることを強く希望いたします。

そして、ドクコン開催日の夜(年次大会前夜)は、ドクコン参加者のご希望にできるだけ沿えるよう、数人のシニアの学会員をお呼びして、懇親会も開かれます。くつろいだ雰囲気

気の中で、先輩研究者とのカジュアルな対話を通して、良い研究とはどのようなものか、研究を行う上での手ごかりや悩み、研究者としてのあり方などを考える贅沢な時間をお楽しみください。

今年の年次大会(神戸大学)がオンライン開催となったことに伴い、ドクコンもその前日にオンラインで開催をすることになりました。それに伴い、例年とは異なる方法での開催となります。コロナ禍の影響は免れませんが、若手研究者を育成しようとするオーガナイザーの先生方の熱意は潰れません。

ドクコンに関心を持たれた大学院生の会員は、まずは大学院生セッションでの報告に奮ってご応募ください。それがドクコン「インビテーション・レター」への最初の一步となります。

大会委員会

【 2021 年度 組織学会高宮賞 】

2021 年度組織学会高宮賞は、以下の通り決定いたしました。

【著書部門】

受賞者：岩尾 俊兵(現所属：慶應義塾大学)

著書名：『イノベーションを生む“改善“：自動車工場の改善活動と全社の組織設計』

(有斐閣 刊)

受賞者：兒玉 公一郎(現所属：日本大学)

著書名：『業界革新のダイナミズム：デジタル化と写真ビジネスの変革』

(白桃書房 刊)

【論文部門】

受賞者：井口 衡(現所属：京都産業大学)

論文名：「同族企業における事業承継の不確実性と長期的投資行動」

(組織科学 Vol.53 No.3)

受賞者：酒井 健(東北大学)

論文名：「組織の正統性修復における経営者の表情

－期限切れ食肉事件の比較事例分析－」

(組織科学 Vol.53 No.4)

2021 年度組織学会高宮賞 審査報告

審査委員長 沼上 幹
担当評議員 長瀬 勝彦
山田 幸三
担当幹事 生稲 史彦

2021 年度の組織学会高宮賞は、以下に示すとおり、著作部門・論文部門共に 2 点が選出されました。

著書部門

① 岩尾 俊兵『イノベーションを生む“改善”：自動車工場の改善活動と全社の組織設計』有斐閣、2019 年 12 月。

② 兒玉 公一郎『業界革新のダイナミズム：デジタル化と写真ビジネスの変革』白桃書房、2020 年 2 月。

論文部門

① 井口 衡「同族企業における事業承継の不確実性と長期投資行動」（『組織科学』2020 年 53 巻 3 号、pp. 4-17）

② 酒井 健「組織の正当性修復における経営者の表情：期限切れ食肉事件の比較事例分析」（『組織科学』2020 年 53 巻 4 号、pp. 64-78）

受賞された皆さんには心からお慶びを申し上げます。いずれも優れた業績であり、組織学会の会員の皆様は既に読了されている方も多いかと思われますが、慣例ですので、ここで簡単に審査委員会からのご紹介をさせていただきたいと思えます。

まず岩尾さんの『イノベーションを生む“改善”』は、ボトムアップ型のインクリメンタル・イノベーションのように思われているカイゼンが、その波及効果の作り方次第では非常に大きなイノベーションになり得る、ということ主たる命題として主張している多角的実証研究の成果です。インクリメンタル・イノベーションはひとつずつが簡単なもので、それほど他社とは変わらないと思われがちですが、実は、インクリメンタル・イノベーションとしてのカイゼンは、その初めの一步を踏み出した後で、そのイノベーションの波及の範囲を、時間的・空間的に、どのように設定するかで、その全体像が大いに変わってきます。たとえば本書で議論されているような、工場内のライン内スタッフという組織は、個々の現場の問題を大きな設備投資にまで結び付ける連結ピンとして機能する可能性があります。これができれば、一見、インクリメンタル・イノベーションに見える始まりが、その後の累積によって大きなイノベーションになる可能性があり、またこのプロセスはその組織に埋め込まれているため、他社の模倣ができない障壁にもなり得ます。岩尾さんの

独自の視点からカイゼン活動を捉えた実証研究として非常に興味深い論理の展開と実証的な知見を生み出していると審査委員会は本書を高く評価しました。

また、論文では十分に語る事の出来ない内容を、参与観察・シミュレーション・質問票による比較分析・インタビュー調査など多様な方法論を用いたマルチ・メソッドの実証研究として多面的に書き上げている点も、審査委員会一同から高い評価を受けています。本書のような実証研究に触れると、作業現場のカイゼンばかりでなく、イノベーションと組織設計のダイナミックな関係へと視野を広げて、実証的・理論的に捉えていく研究の流れが示唆され、組織学会が取り組む実り豊かな研究方向が示唆されているように思われます。

兒玉さんの『業界革新のダイナミズム』は、銀塩写真システム（カメラ・フィルム・現像・プリント）からデジタル写真システム（カメラ・センサー・PC・自宅プリンタ）へと産業全体が変化していく（ように思われた）途中で、デジタル・ミニラボが開発され、それが普及したことによって、消費者が写真（デジタル・データ）をプリントするという行動を長く維持することになり、結果的にデジタルにも銀塩にも対応する銀塩のプリント（印画紙）が比較的長く残ったという事例を分析した実証研究の成果です。この間の現象について、書籍ならではの詳細な記述と、意図せざる結果の読み解きがなされ、既存の理論の延長上とは異なる指摘が得られている点が兒玉氏の書かれた本書の魅力です。たとえば、デジタル・ミニラボは、デジタル・カメラ用に開発されたのではなく、銀塩フィルムをより美しくプリントするために開発されたものです。それが結果的にデジタル・カメラのアウトプット用にも活用されたため、入力部分はデジタル・カメラに代替されても、出力部分は銀塩印画紙を使う写真システムが一時的に成立し、システム全体の急激で全面的な代替という現象が起こらなかったのです。著者はこのプロセスを詳細に記述し、ミクロの行為とマクロのパターンの相互作用を分析して、イノベーションのプロセスに関して、産業レベルでもゴミ箱モデル的な思考が必要だと主張しています。

事例としてスマートフォンやタブレット端末の登場後の産業進化プロセスに関する分析が不足している点には課題が残っていますが、長年を費やしたインタビュー調査・文献資料調査が結実した充実した実証研究の成果であることは疑いなく、論文ではなく、著書としてまとめることで初めて生み出される充実した議論が盛り込まれており、その点が審査委員会では高く評価されました。

井口さんの論文「同族企業における事業承継の不確実性と長期投資行動」は、同族企業の後継者が決まっているか否か、またその後継者が子供かどうか、ということによって長期投資がどのように変わるのかを明らかにする実証研究です。社会情緒的資産(socio-emotional wealth)と近視眼的損失回避(myopic loss aversion)の枠組を用いて仮説を導出して実証研究を行ない、その結果、①事業承継の確実性が高いと自分の代だけの損益計算

よりも視野が長くなって長期投資を行う傾向が高くなること、②子供が承継者の場合、リスクの高い投資を回避する傾向が高まり長期投資傾向が弱まることを実証しています。

同族企業だからリスクがとれるとか、逆に同族企業はリスクをとらないというような多様な見解が存在してきた領域に、それらの一見相矛盾する知見を総合するためのフレームワークを提出し、そのフレームワークの有用性をエビデンスによって確認したという意味で重要な貢献を生み出していると評価できます。言われてみれば「なるほど」と思えるような納得感なども含めて、生み出した知見が他にも使えそうだという知的な刺激などの点で大変良い研究だと審査委員会は高く評価しました。なお、井口氏は同族企業の研究として提示していますが、ここで登場するロジックの多くは、実は従業員主権的な日本企業にも当てはまるところが多々あり、今後はもう少しコンテキストを広げて、日本企業のガバナンス全般についても研究が広がっていくのではないかと期待されます。

酒井さんの論文「組織の正当性修復における経営者の表情：期限切れ食肉事件の比較事例分析」は、経営者の表情をデータとして活用して、組織の正当性回復の局面で経営者の表情が重要な役割を果たすことを示した実証研究です。既存の研究は、組織の不祥事等が発生したときに、組織を代表する個人が行う言語的なコミュニケーションによって、その組織の正当性の修復や信頼の回復など左右されるという研究を行ってきました。しかし、酒井さんは不祥事の際の責任者の表情に注目して、それを実証にのせるための注意深い作業を行って研究を進めています。

2014年7月に発覚した仕入れ元の中国企業による期限切れ食肉事件に対して、ファミリー・マートとマクドナルドがどう対応したかを、ある種の自然実験のように巧みに活用し、両社の社長の言語的なコミュニケーションと表情の写真を用いて被験者に印象を回答してもらい、そのデータを分析した結果、言語的なものではなく、むしろ表情が、その後の両社の信頼・業績回復に影響を及ぼしていたという主張を展開しています。方法論的な完成度という点では若干の課題が残るように思われますが、組織論研究のデータ収集に画像情報を巧みに活用し、今後の組織論研究の方法論的な多様性の進化に力強い弾みを与えたところが審査委員会から高く評価されました。ネットを通じた調査を考えれば、おそらく、今後はさらに、動画を活用した調査・実験なども組織論で活発に扱われていく方向性が示唆されます。新しい研究の広がりを示唆する知的興味深さが強く印象に残る論文だと思います。

審査委員長 沼上 幹

2022 年度組織学会高宮賞 受賞者挨拶 —著書部門—

『イノベーションを生む“改善”-自動車工場の改善活動と全社の組織設計』

(有斐閣 刊)

慶應義塾大学 岩尾 俊兵

このたびは組織学会高宮賞著書部門という大変な荣誉にあずかりまして感謝申し上げます。一見遠回りになりそうですが、最近、哲学研究者と話した際に「ああこの人って人生で何か一つの問題をずっと考え続けてきたんだなって人には深みがあるよね」というお言葉を頂戴しました、というところからご挨拶を始めさせていただきます。

それは、単なる一般論だったのかもしれませんが。あるいは、私が、最近シェアリングエコノミーの研究に手を出していたり、学術書とビジネス書の間間的な経営書『日本式経営の逆襲』（日本経済新聞出版）を書いたり、児童小説を出版しようとしていることへの忠告だったのかもしれませんが。いずれにしても、その一言をきっかけに「自分はいったいどんな問題を考えてきたのだろうか」と、ここ一か月ほど自問自答しておりました。

そうしているうちに、そういえば自分は幼稚園ぐらいからなぜか「さだまさし／グレープ」が好きだったなと思い出しまして、どうも自分は「どうして個々人で会えば善人しかいない世の中で、善人が集まっているはずの組織がこんなに悲しみにあふれているのだろう」ということを考えてきたようだと思えました。いつもニコニコ（ヘラヘラ？）お調子者の私ですが、その実ずっと虚しさや悲しさから逃れられずにおります。

たとえば、私の地元の佐賀県有田町で、認知症を患って老人ホームにいらっしゃった方がおられました。その方が毎日施設を脱走して、ただ何もせず散歩して帰ってくるということがありました。不思議に思って後をつけると、実はその方は、15歳から65歳まで働いた陶磁器製造会社への通勤路を歩いて帰っていることが分かりました。一生涯家庭も持たず、その会社の寮に住み、働き続けた方でした。親兄弟の名前も忘れてしまっても、その会社の名前と通勤路だけは覚えている様子に、何とも言えない悲しみを感しました。

また、同じ陶磁器製造会社の子会社が、焼き物製のベンチやテーブルを作って大成功したのですが、大成功をしたとたんに親会社の役員人事および一族の家督争いが起きて、解散するということがありました。そこに集まった有為な人材は全国ちりちりになり、中には今でもインターネット掲示板に張り付けてこの件について誹謗中傷を続けているという廃人のような生活をしている人もいます。優秀な人材が集まって、良い仕事・楽しい仕事ができる、利益も出るというのに、どうして争いになるのだろうと疑問に思いました。

このように、善人が集まっても、有能な人が集まっても、なぜか人が集まると悲しみが生まれる。裏返しに言えば創造性を発揮できない、イノベーションが生まれません。そんな

状況がありうるのはなぜか、ということを私は考え続けてきたのだと思います。そのようにとらえてみますと、今回の受賞図書『イノベーションを生む“改善”』も、日本の十八番カイゼンが組織の設計いかんによって大きく育つことも小さく留まることもある、色んな意味での創造性を発揮できうるということを示したかったのではないかと思うようになりました。

そんなわけで、いつも漠然とした悲しみに包まれている私ですが、このような賞もいただき、しばし悲しさもお休みのようでありますので、これからも前向きにこの悲しさと付き合っていく、研究に邁進したいと思います。

この度はありがとうございました。

2022 年度組織学会高宮賞 受賞者挨拶

— 著書部門 —

『業界革新のダイナミズム：デジタル化と写真ビジネスの変革』

(白桃書房 刊)

日本大学 児玉 公一郎

この度は栄誉ある組織学会高宮賞をいただくことになり、大変光栄に感じております。

本書は、写真のデジタル化という大規模なイノベーションに直面した、写真プリント業界の興亡をめぐるプロセスについて重層的な分析を試みたものです。

イノベーションが社会を変革し発展させるということは論を待たないでしょうが、近年のイノベーション研究では「いかにイノベーションを起こすか」という問題意識の下で、イノベーションそのものや、それを担う人々に関心が集中していたように感じます。しかしながら、イノベーションには、それによって既存のビジネスが存続できなくなる可能性もあり、イノベーションが恐れの対象になっているということもまた事実です。このような側面についても理解を深めることは、社会の安定的な発展にとっても不可欠だと考えられます。この本においてイノベーションによる既存ビジネスへの影響に注目する意義は、イノベーションに対する社会的な要請が高まっている現在こそ強調されるべきであると考えています。

本書は私の博士論文をベースにしておりますが、そこでご指導くださった一橋大学の沼上幹先生、加藤俊彦先生をはじめ、この本を纏めるまでに多くの方々のお力添えをいただきました。この場をお借りしましてお世話になりました皆様に感謝申し上げます。

特にこの組織学会においては、『組織科学』のエディターやレフェリーをお務めくださった先生方をはじめ、この場にいらっしゃる多くの先生方からさまざまな建設的なアドバイスを頂戴しました。この研究に取り組んだ 10 年ほどの間、常に 3 歩進んでは 2 歩下がる

ような感覚でありましたが、それでもかろうじて歩みを止めずに前進を続けることができたのは、諸先生方の励ましがあつたからこそと考えております。そうした良い経験にたくさん恵まれて、その一つ一つの場面を思い出すだけで胸が熱くなります。ここでは個別にお名前を挙げられませんことを、どうかご容赦ください。

さらに、ここで何としてでもお伝えしておかねばならないのは、本書を出版して下さった白桃書房さんについてであります。われわれ組織学会のメンバーは、日ごろから白桃書房さんからは多大なご支援をいただいているわけですが、本書の出版においても大変お世話になりました。特に、編集をお引き受けくださった平千枝子様には、言葉では言い尽くせないほどの多大なご指導・サポートをいただきました。素晴らしい編集者との巡り合わせは、本当に幸運であつたと感じております。

昨今の厳しい出版情勢の下では、学術出版も大変困難になってきているということは、いろいろと耳にすることがございますし、本書のようないささか地味な研究などは特に敬遠されがちだということも重々承知しております。そのような中で、こうした出版社の存在があればこそわれわれがこの仕事に取り組めるということ、改めて痛感した次第であります。本日、この場に大矢栄一郎社長にもご出席いただいておりますが、白桃書房さんには改めて感謝申し上げたいと思います。

研究者としてはまだまだ未熟であります。どうか引き続きご指導くださいますようお願い申し上げます。繰り返しになりますが、本日は誠にありがとうございました。

2021 年度組織学会高宮賞 受賞者挨拶

— 論文部門 —

「同族企業における事業承継の不確実性と長期的投資行動」

(組織科学 Vol.53 No.3)

京都産業大学 井口 衡

この度は、高宮賞論文部門に選出していただき、ありがとうございます。嬉しさや誇らしい気持ちもちろんありますが、少し恐縮する気持ちも抱えています。

今回、賞を頂いた論文は、査読をしていただいた先生方を含め、多くの先生方との議論の中でうまれたものであり、私一人の力によるものではありません。2017年に組織学会でこの論文を報告した際には、たくさんのコメントをいただきました。また、中小企業15000社を対象とした大規模な調査を行うことができたのも、当時大学院生として所属していた早稲田大学商学研究科の先生方から資金の面でも、調査手法の面でもご支援をいただくことができたからです。ここではお一人お一人お名前は申し上げませんが、今、私の頭の中は皆様のお顔で一杯になっています。ご支援くださった皆様に心より感謝申し上げます。

組織学会は私にとってたいへん思い入れのある学会です。学問の世界に足を踏み入れ、

初めて入会した学会は組織学会でしたし、初めての学会報告も組織学会でした。それから10年近く経ち、いろいろとありましたが、現在も研究者として家庭をもち生活できているのは、組織学会の皆様をはじめ、上智大学や早稲田大学、そしてこれまで勤務してきた大学で、叱咤激励し、手を差し伸べてくださった先生方のおかげだと思っています。

今回頂いた名誉ある高宮賞の名に泥を塗ることのないよう、今後またゆまぜ研究を続けてまいります。学ばなければならないことはあまりにも多く、力の足りないことは十分承知していますが、これからも厳しいご指導と優しいご支援をよろしくお願いいたします。

2021年度組織学会高宮賞 受賞者挨拶

— 論文部門 —

「組織の正統性修復における経営者の表情—期限切れ食肉事件の比較事例分析—」

(組織科学 Vol.53 No.4)

東北大学 酒井 健

このたび第37回組織学会高宮賞(論文部門)をいただきました。大変嬉しく、光栄に思います。受賞対象となった論文は、不祥事で正統性が低下した組織の経営者が記者会見で見せる表情が正統性の修復に大きな影響を及ぼすことを、比較事例分析を通じて具体的に示したものです。ご協力いただきました皆様に改めて心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

実を申しますと、本論文の核である「経営者の非言語(表情)」の分析は、本研究に着手した当初の私にとっては、ほとんど土地勘のない話題でした。2つの事例を比較していて表情が鍵になりそうだと気がついたとき、この議論を正面から取り扱えるかどうか不安もあったのです。結局、自分の重要テーマの1つである正統性について理解を深める一歩になるかもしれないと思い、やってみようと思ったのです。

限られた時間の中で早く業績を積み増したい若手研究者にとって、「やる」「やらない」の線引きは重要な問題になっています。早い段階で「やる」領域を厳密に定めて、そこから外れたものは「やらない」方が戦略的だという考えも十分に理解できるものです。しかし今回の私のケースでは、自分にとって未知だった話題について「やる」という選択をしました。その結果、前半に停滞期はありましたが、そのゾーンを抜けた後に研究が加速していく感覚がありました。「急がば回れ」が当てはまったケースだったと言えるのかもしれませんが、もしもあの時に「これは自分の仕事ではない」と線引きをして、当時の私にとってもっと身近な議論ができそうな調査対象を探していたら…?その結果は誰にもわかりませんが、私の中では、むしろ研究は停滞し、高宮賞という素晴らしい結果は得られなかったらと思うています。

最後に、念のため次のことをお伝えしておきたいと思います。本論文では「現代社会で

は現実に表情が重要な影響力を持っており、組織の正統性修復を目指す経営者はプラグマティックにそれに対応する必要がある」点を指摘しているのもであって、表面的な取り繕いが支配する社会を私が志向しているわけではありません。むしろ私は、表面的なコミュニケーションが支配的になっている現状にある種の怖ささえ感じており、このパンデミックが落ち着いて、恩師や友人たちと面と向かって本音で語り合える日を心から楽しみにしているのです。そのような日が早く来ることを願いつつ、引き続き研究に精進していきたいと思えます。改めて、このたびはありがとうございました。

【新入会員紹介】

2021年度(第17期)には、以下の正会員57名、準会員(個人)10名、準会員(団体)1社が入会しました。また、準会員から正会員へ会員種別を変更した会員は4名でした。

【総務関係】

【1】年会費納入のお願い

当学会は2021年9月1日より2022年度(第18期)に入っております。年会費として正会員の方は12,000円、準会員・個人の方は8,000円のご納入をお願いいたします。

詳細なご請求につきましては、既に会員の皆様へお送りしております「2022年度(第18期)年会費のご通知」のとおりです。

1. 口座振替(自動引落)の方

9月27日にご指定の口座から振替いたしますので、お確かめください。お支払い手数料は当方にて負担いたします。また、口座振替入金事務手続き後に領収書を発行いたします。こちらは手続き上の関係で確認までお時間を頂戴いたしますので、11月上旬発送予定となります。

2. 請求書をお申し込みいただいた方

今年度分の請求書は、2022年4月の発行・送付となります。

期間内に上記の支払方法へお申し込みいただいていない方には、従来どおり、ゆうちょ銀行の「払込取扱票」をお送りしておりますので、窓口にてお手続きください。

※一部会員には滞納や支払遅延がみられ、予算執行上の扱いや決算時の未払い会費処理等で、運営上の問題が発生しております。会員の皆様には事情をご理解いただき、何卒速やかなお支払いをお願い申し上げます。

【2】大会出席・委任状送付のお願い

2022年度組織学会年次大会では、2021年10月30日(土)に会員総会が開催されます。会員総会は、組織学会の重要な議決機関です。また、今回の会員総会は、特定非営利活動法人としての総会も兼ねております。特定非営利活動法人の総会開催には正会員の5分の1以上の出席が必要とされております。正会員の皆様方には、是非ともご出席いただきますようお願いいたします。

2022年度組織学会年次大会が「オンライン大会」となりますのに伴い、会員総会も「オンライン開催」となります。

やむを得ずご欠席の場合には、学会ホームページより「委任状」をご提出くださいますようお願い申し上げます。ご欠席の可能性がある場合にも、委任状の提出をお願いいたします。委任状をお送りいただいた上で総会にご出席された場合、委任状の総数から出席人数を差し引きます。

総会出席、ならびに委任状の送付は、すべての正会員の皆様の意向を確認するための措置です。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

【2022年度 若手学会員を対象とする研究支援について】

組織学会では、組織研究を活性化するために、若手学会員の英文論文の執筆・発表や共同研究等を奨励・促進する研究支援を、下記の通り実施します。

＝ 記 ＝

A) 英文論文の校正支援(1件当たり5万円)

(1) 支援内容

- ① 組織科学英文年報や国際ジャーナルに英文論文を投稿する論文、国際コンファレンスや海外の学会で発表するフルペーパー(アブストラクトのみの場合は支援対象外)の英文校正費用を対象として、1件当たり5万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 応募締切時において40歳未満の正会員が第一著者であることが必要です。
- ② 再応募も可能ですが、一度支援を受けた場合には、最低2年間は再応募できないものとします。

(3) 応募手続

- ① 応募者の連絡先や投稿先などを、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。

- ② すでに投稿済みの場合には、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を添付してください。
- ③ 締切は年3回(12月・3月・6月)設けます。2022年度は、2021年12月3日(金)、2022年3月4日(金)、6月3日(金)を期日とします
- ④ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。受付は締切日の17時までとします。

(4) 支援決定後の手続等

- ① 支援決定後に投稿する場合は、研究奨励費受領から1年以内に投稿することが望まれます。投稿後は、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を組織学会に提出してください。
- ② 学術ジャーナル・学会予稿集などに採択され、掲載が決定した場合には、掲載論文に組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り(電子ファイルもしくはハードコピー3部)を組織学会事務局に提出してください。

B) 若手会員を中心とする共同研究(1件当たり10万円)

(1) 支援内容

- ① 代表者およびメンバーの半数以上が、応募締切時点で40歳未満の正会員である共同研究を対象として、1件当たり10万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 共同研究のメンバー全員が正会員で、代表者およびメンバーの半数以上が応募締切時点で40歳未満であることが必要です。
- ② メンバーの所属先は、複数の機関であることが望まれます。
- ③ 継続申請も可能ですが、原則として最長2年までとします。

(3) 応募手続

- ④ 参加メンバー氏名、研究テーマおよび内容等を、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ⑤ 締切は年1回(3月)設けます。2022年度は、2022年3月18日(金)を期日とします。
- ⑥ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。

(4) 支援決定後の手続等

- ⑦ 研究グループは自らの責任において活動し、研究奨励費受領から1年以内に研究成果報告書を、組織学会事務局宛に提出してください。研究成果報

告書は、組織学会ホームページで公開します。

- ⑧ 研究成果については、研究発表大会・年次大会などで発表することが望めます。他学会等で研究成果を発表する際には、組織学会からの補助を受けている旨を明示してください。論文などとして学術誌等に掲載が決定した場合には、組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り(電子ファイルもしくはハードコピー3部)を組織学会事務局に提出してください。

【 事務局より 】

【1】口座振替結果状況について

会費の口座振替(自動引落)は、三菱 UFJ ニコス株式会社(NICOS)の収納代行サービスを利用しております。そのため、内容確認のためにお時間をいただきますので、何卒ご了承ください。

【2】会員情報の登録変更について

会員データ登録内容(所属、住所、電話、FAX、メールアドレス等)に変更が生じた場合は、必ずご本人様から直接事務局へ、お早めにご連絡くださいますようお願いいたします。

※連絡方法は、FAX またはメールをご利用ください。

【3】大会開催前後の連絡について

年次大会・研究発表大会の開催(土・日)において、事務局員は会議運営および諸準備のため、前日の金曜から現地入りしております。また恐縮ながら、翌月曜日は代休日となります。その間、事務局宛の電話・FAX・メールを確認することができません。ご不便をおかけいたしますが、よろしくお願い申し上げます。

なお、次の2022年度組織学会年次大会(神戸大学)は「オンライン大会」となりますが、準備の都合上、金曜日のご連絡はお受けすることができません。

組織学会通信 第 89 号

2021 年 9 月 20 日

発 行 特定非営利活動法人 組織学会
事務局

〒100-0005 東京都千代田区丸の内 2-5-2
三菱ビル 地下 1F 171 区外

TEL : 03-5220-2896

FAX : 03-5220-2968

URL : <https://www.aaos.or.jp>